

「思考・判断・表現力」を育む学習支援

石川 倫子[†]第73回国立病院総合医学会
(2019年11月9日 於 名古屋)

IRYO Vol. 75 No. 2 (140-142) 2021

要旨

どのような時代の変化にも対応できるためには、知識・技能、思考力・判断力・表現力をベースとして、自己の主体性を軸にした学びに向かう能力が求められる。臨床看護実践においても、医療・看護が変化する状況の中で、患者にとって何が課題で、解決できる方法を地域も含めた多職種で考え（思考・判断力）、実践していく（表現力）ことが看護職に求められる。そのために看護基礎教育で思考・判断・表現力を強化していくことが重要である。

学生が思考・判断・表現力を育むためにはアクティブラーナー（能動的な学び手）になっていく必要がある。しかし、現行のアクティブラーニングでは外的活動による能動が中心で、その活動が強化されると自らの参加意識が低くなり学生が受け身の姿勢になるという課題をもつ。そこで、内的活動における能動性も重視した学習であるディープ・アクティブラーニングが注目されている。そのディープ・アクティブラーニングの一つがパフォーマンス評価である。

パフォーマンス評価とは知識・技能の総合的な活用力を質的に評価する「学習としての評価」である。すでにパフォーマンス課題を取り入れた演習では、学生の思考・判断力を高める効果がある。学生が思考・判断・表現力を育むには、パフォーマンス評価を取り入れた授業設計、カリキュラム設計を行うことが望ましい。

キーワード 思考・判断・表現力、ディープ・アクティブラーニング、パフォーマンス評価

看護基礎教育で「思考・判断・表現力」を育む必要性

就労人口の減少にとまなう人工知能（AI：Artificial Intelligence）の発達によって、これからの看護職には劇的な役割の変化がおけると予測される。そのためにAIには果たせない真に看護職が果たすべき役割を十分に考え、実行できる力が求められる。そこで、看護基礎教育では未知の状況に対応できるよう「思考・判断・表現力」を育成する必要

がある。

「Society5.0に向けた人材育成」（Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会、平成30年6月5日）では、他者と協働して思考・判断・表現を深める対話力や科学的に思考・吟味し活用する力などがこれから求められる力として示されている。それが大きく表れているのが2019年に改正された初等教育の指導要領で、育成すべき能力を「主体的に学習に取り組む態度」、「思考・判断・表現」、「知識・技能」に変更されている。どのような時代の変化にも対応で

石川県立看護大学 [†]看護教員

著者連絡先：石川倫子 石川県立看護大学 〒929-1210 石川県かほく市学園台1-1

e-mail：ishi1995@ishikawa-nu.ac.jp

(2020年3月23日受付、2020年11月13日受理)

Learning Support that Fosters Thinking, Judgment and Expressiveness

Noriko Ishikawa, Ishikawa Prefectural Nursing University

(Received Mar. 23, 2020, Accepted Nov. 13, 2020)

Key Words：thinking, judgment and expression, deep active-learning, performance assessment

きるためには、知識・技能、思考力・判断力・表現力をベースとして、自己の主体性を軸にした学びに向かう能力が求められる。臨床看護実践においても、医療・看護が変化する状況の中で、患者にとって何が課題で、解決できる方法を地域も含めた多職種で考え（思考・判断力）、実践していく（表現力）ことが看護職に求められる。そのために看護基礎教育で思考・判断・表現力を強化していくことが重要である。

学生が「思考・判断・表現力」を育むための方法

看護基礎教育検討会報告書（厚生労働省 令和元年10月15日）では、コミュニケーション能力や臨床判断能力を養うための演習の強化、その方法の一つとしてアクティブラーニングの活用が示された。これらの能力を養うには、学生を持つ知識・技能を活用して思考・判断、表現することで、知識・技能の定着を図るという学習の仕組みを展開する必要がある。同時に、学生がアクティブラーナー（能動的な学び手）になる学習活動を考えていかなければならない。

1. 従来の講義とアクティブラーニングの学習活動の違い

従来の講義の学習活動は、主体が教師、対象が学生で、教師が学生に道具（教材）を工夫して学生が理解できるようにし、その学生の学習結果を評価していた。アクティブラーニングの学習活動は、主体が学生で、対象は課題、学生は課題を解決するために知識を活用し、学生同士の共同体をつくり、ルールを決めて分業し、課題を解決していくのである。

2. アクティブラーニングの課題とディープ・アクティブラーニング

しかし、現行のアクティブラーニングでは、①活動されることが強化されると自らの参加意識が低くなり学生が受け身の姿勢になる、②高次の思考を行うための知識の獲得と思考・判断する活動との授業時間内での両立が難しいなどという課題があげられている¹⁾。この課題を解決するために、外的活動における能動性だけでなく、内的活動における能動性をも重視した学習であるディープ・アクティブラーニングが注目されている。

ディープ・アクティブラーニングは、学習内容の深い理解を目指すことでアクティブラーニングの質を高めようとするものである。それには深いアプローチが必要であり、深いアプローチとは意味を追求することである。たとえば、概念を理解するために既有知識や経験に関連付けたり、共通するパターンや根底にある原理を探ることによって、理解が深まり、自分の理解のレベルを認識するのである。この深い理解を学生ができるための学習方法が学習としての評価であるパフォーマンス評価である。

パフォーマンス評価の実際

1. パフォーマンス評価の定義とパフォーマンス課題の位置づけ方

パフォーマンス評価とは、知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求める評価方法である。パフォーマンス課題によって学力をパフォーマンスへと可視化し、「ルーブリック（評価指針）」を使うことによって、パフォーマンスから学力を解釈していくとされている²⁾。パフォーマンス評価を用いるには逆向き設計という発想の転換が必要である。つまり、①求められている結果（目標）を明確にする、②承認できる証拠（評価方法）を決定する、③学習経験と学習支援（授業の進め方）を計画するを三位一体のものとして考えてカリキュラムや単元を設計する³⁾。これは、タイラー原理の一つである「目標と指導と評価の一体化」を発展的に継承している。この時に、学習経験（パフォーマンス課題）を位置づけるには2つの方法がある。パーツ組み立て型と繰り返し型である。たとえば、パーツ組み立て型は呼吸、循環、体温それぞれに関するパフォーマンス課題を行い、科目終了時に呼吸・循環・体温を総合したバイタルサインに関するパフォーマンス課題を位置づける方法である。繰り返し型は、科目の最初からバイタルサインに関するパフォーマンス課題を位置づけ、それを繰り返し実施する型である。

2. 科目「フィジカルアセスメント」におけるパフォーマンス評価の実践例

自己学習能力を高めるために反転授業も組み合わせる科目の授業設計をした。またパフォーマンス課題はパーツ組み立て型で位置づけた。要するに、従来の知識伝達の授業を予習とし、テキストや文献を

紹介して調べてくるだけではなく、VTRを視聴し、バイタルサインをイメージ化してくることを事前課題とした。知識理解のための講義では事前学習課題で学生の理解が難しい内容を精選して授業を行った。演習では、呼吸測定を必要とする患者の事例などのパフォーマンス課題を個人ワークし、それを用いてグループでパフォーマンス課題の解法を共有し、グループでの解法を実演してもらおうという方法をとった。最後にバイタルサインを必要とする患者の事例を用いたパフォーマンス課題を行った。パフォーマンス課題の作成にあたっては、看護現場のリアリティな場面を用いる、解法（答え）がない、評価の観点が明確であることを大切にしたい。

パフォーマンス評価における 学生の思考・判断への効果

点滴静脈内注射の技術演習にパフォーマンス評価を取り入れ、その学習効果を検証した。

従来の講義・技術演習とパフォーマンス課題を実施した演習とを比較した。その結果、パフォーマンス課題を実施した演習の方が有意に思考・判断がで

きていた。パフォーマンス評価は学生の思考力・判断力を高めるには効果があるといえる。

最後に、学生がアクティブラーナーとなるカリキュラム設計が、今必要なのではないかと思う。そのためにも教員一人一人が日々の授業を学生の学びの結果から評価し、それを反映したカリキュラム創りをしていく必要がある。

〈本論文は第73回国立病院総合医学会シンポジウム「未来の看護師を育む新カリキュラム」において「思考・判断・表現力」を育む学習支援」として発表した内容に加筆したものである〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) 松下佳代. ディープ・アクティブラーニング. 東京: 勁草書房; 2016.
- 2) 松下佳代. パフォーマンス評価. 東京: 日本標準ブックレット; 2007.
- 3) 西岡加奈恵. 資質・能力を育てるパフォーマンス評価. 東京: 明治図書; 2016.